文化の家
公　演
こぼれ話

山下和仁

「ゴヤによる 24 のカプリチョス」一部

「世界のヤマシタ」がついに文化の家に登場！

文化の家事務局長補佐兼事業係長　生田　創

天才の中の天才、山下和仁！

16歳にして世界の3大ギターコンクールを制覇し、オーケストラの名作を一人で演奏するなど、前人未到の快挙を成し遂げてきた天才の中の天才、その名は山下和仁。

２０００年、その山下さんが「ゴヤによる24のカプリチョス」という曲の演奏を切望していることを知りました。それは画家ゴヤの版画24枚をスクリーンに映し出して演奏するという内容で、音楽好きの方のみならず、さまざまなお客様に楽しんでもらえると考えました。ところが当時のマネージャーから「もう少しお客さんが育ってからにしては？」と言われてしまい、諸条件も整わずこの企画は流れてしまいました。２００９年、マネージャーが代わり、再びこの話が浮上しましたが日程が合わずまたしても見送り。三度目の正直でようやくブッキングが成立、２０１９年11月ついに実現の運びとなったのです。構想からすでに19年が経過していました。山下さんは海外での活躍や名声にもかかわらず近年国内でのコンサートは少なく、東海地区での公演は9年ぶりでした。その意味でもレジェンドを再び知っていただく絶好の機会と感じていました。

妥協を許さない完璧主義者？

さて、山下さんと言えば一切の妥協を許さない完璧主義者というイメージもあり、数々の逸話を耳にしました。自分が指定したホールでしか弾かない、誰も聞こえないくらいの微弱音でも演奏に影響する等々…その人物像はベールに包まれていて、スタッフは一同緊張して準備を進めていました。

イメージと現状の擦り合わせ

いよいよ公演前日、山下さんがリハーサルにやってきました。会うなり笑顔で「こないだコンサートに来ていただきましたよね」と言ってくださり、すべての不安は消え去りました。半年前に大阪でのコンサートでほんの少しだけごあいさつしたことを覚えてくださっていたのです。山下さんは、映像、演奏位置、楽器の状態、照明、音響にいたるまで、私たちスタッフの意見を聞きながら入念に自分のイメージと現状を擦り合わせていきました。驚いたことに当日も含めてほとんどリハーサルは行わず、本番でどのような演奏になるのか、誰も判らない状況でした。

万華鏡のような世界が…

そして、ついに開演。最初の一音から、目の覚めるような澄み切った音色！山下さんの集中力は驚異的で、ゴヤと対話し、あるいはその心情を語るように、多彩を極めた万華鏡のような世界が森のホールを満たしました。そして、最後の音が鳴り響いた後もすべての聴衆がその余韻を共有した奇跡的な瞬間が生まれました。それは、かつて言われたマネージャーさんの言葉への答えでもありました。

終演後、山下さんは「素晴らしいホールとお客さんでした！」と心底喜んでみえていて、その姿からは「謎のベール」はとうに消え、紳士でとても温かく、純粋なお人柄だけがスタッフの心に残りました。